

令和6年度 静岡市在宅医療・介護連携協議会
第1回啓発研修部会・地域支援部会の合同会議

- 1 日 時 令和6年7月4日（木）19：15～20：15
- 2 場 所 オンライン
- 3 出席者 （出席）＜啓発研修部会＞吉永部会長、近藤委員、坪井委員、平野委員、
矢野委員
＜地域支援部会＞小作部会長、石上委員、小長井委員、近藤委員、
成島委員
（事務局）地域包括ケア・誰もが活躍推進本部 酒井次長
在宅医療・介護連携推進係 北原副主幹、白鳥主任主事
- 4 傍聴人 0人
- 5 次 第 （1）開会
（2）挨拶
（3）議事
①協議事項
ACP（人生会議）の普及啓発について（案）
（4）閉会
- 6 会議内容
（1）開会 開会宣言及び会議成立の報告（委員9名全員の出席により会議は成立）
（2）挨拶
（3）議事

事務局

ACP（人生会議）の普及啓発について（案）の説明（資料1）

平野委員

資料1で、人生の最終段階における医療ケアについて話し合ったことがない理由について『話し合うきっかけがなかったから』とあったが、一番のポイントだと思っている。話し合うきっかけのためにエンディングノートを作成した。エンディングノートという名前については、エンディングノート作成部会で議論し、副題として『～これからの人生を豊かに

していくために〜』としたわけだが、その理解はまだ得られてないように感じる。これから専門職や市民へ啓発活動をしながらか、皆さんの中に定着して、腑に落ちるものにしていけばいいと思う。まず、このエンディングノートを使うきっかけが必要だと考える。それを持ちながらか、専門職をどのように活用すれば普及啓発に繋がるのだろうかということが一番大事なポイントだと思っている。

私は9月、10月にエンディングノートについて話をさせてもらうが、医療職の私自身は無くても困らない。それはなぜかと言うと、医療職は、アドバンス・ディレクティブ、事前指示書が最後は大事になってくるので、何らかの書類を使ったり、絵で描いたりしながら行ってきたためである。また、医療的なことを行ったあとのこと、葬儀や相続等についてはあまり関わらない。エンディングノートの8ページの『もしものときの医療の希望』に何かとスポットが当たってしまい、医療職からするとどのように使ったらよいかわからないといったことになるのだけれど、エンディングノートを手を持ちながらか、家族や大切な方に伝えておきたいことがあるのであれば書いてもらくなり、連絡先を書きましょうということがポイントだと思う。

吉永部会長

9月10日に清水区で行う研修は、在宅医等養成研修ということで、これまで在宅医療を実施していない先生にも研修を受講してもらい、在宅医を増やそうというのが元々の趣旨ではあるが、ACPは避けて通れない道だと思う。そのため、清水区の在宅医療や地域包括ケアに関わる多職種の連携の会（インタープロフェッショナルカフェ）にて、エンディングノートの使い方について平野委員から紹介してもらいたいと思って企画している。

成島委員

普及啓発にて知ってもらい、広げて、配布していくことになると思うが、市の方で想定している対象人数は何名ぐらいを想定しているのか。

事務局

エンディングノートの認知度や受けとめにばらつきが大きく、全ての高齢者に配布というのも現時点では難しいことから、まずは専門職の方々を中心に配布し、必要数を検討していく。

成島委員

専門職や高齢者に関わるであろう人には配布されるが、自分の身の回りの人に配布する冊子が無いなど、広めたいのに肝心の部数が追いついてない。ダウンロードすればいいのかもしれないが、やはり冊子の方が広めやすいと思う。

吉永部会長

私も手元には何部かもらってはいるが、まだ使い始めている。配布場所を聞かれることがよくあるので、関心を持っている人は多いのではないかと考えている。

小長井委員

エンディングノートはもちろんコストがかかるし、エンディングノートの存在を知らない方が多い中で、例えばA4用紙1枚で、表面には、遺産など一般の方が興味がありそうな内容をタイトルにし、裏面を見ると、他の内容の案内やQRコードからエンディングノートにたどり着けるようなものを多く配布できれば、知ってもらうための入口としてよいように感じた。

吉永部会長

そういったものがあると確かにいいと思う。また、対象者としてこのような事を考え始める人たちとして65歳以上の方たちへ広げていきたいわけだが、その人たちが自分で手に取るだけでなく、その人たちの家族から勧めてもらおうというのももちろんよいと思うので、紹介するものが色々あった方がいいと思う。新聞等メディアでは取り上げられているのか。

事務局

令和6年4月に静岡新聞に掲載された。今後、広報しずおかに掲載予定である。

平野委員

今の意見は、私も大賛成である。エンディングノートの『終活について考えてみませんか?』と『エンディングノートについて』の内容を、QRコードも含めて、表裏1枚で、手に取りたくなるようなものにするといいと思う。印刷しなくても文明の利器を使いこなす方は、自分で打ち出さだろうし、若い方やお孫さんなどが打ち出して祖父母に渡したりするかもしれない。年末年始など集まったときに、話し合うきっかけにはなるかなと思った。

吉永部会長

資料1で、人生の最終段階における医療ケアについて話し合ったことがない理由について『対象者がいない』という声もあったが、対象者がいないというよりは、使い始めなのか、使い方が今ひとつピンときてないからだと思う。どのような方法であっても、きっかけを作るには、このように使いましようとして導いてあげることが、最初に大事だろうと思う。

平野委員

吉永部会長が言ったように、対象者はたくさんいるけれども、おそらく介護支援専門員などが直近の困り事で終始していると思うので、エンディングノートがあると過去を振り返

りながら、その先の未来へ、私もそろそろそういう時期かなと、想像を膨らませて繋げていけるのではないかと感じる。

吉永部会長

我々医療職もそうである。患者さんの体のことだけ見るのではなくて、心のケアではないけども、外来で時間があれば患者さんの生活とか人生について踏み込んだ会話をするのは、たまにある。在宅では、そういう時間がある程度あるが、外来だとなかなかそういう時間がない。エンディングノートが広まってくれば、エンディングノートを少し見て、この方はこういう人だったんだねなどと、外来のツールとして広がってくところは感じる。

近藤委員

介護支援専門員は、エンディングノートができる前から、必要な人には、どのような治療や介護を受けたいか、どのように最期を過ごしたいか等について聞いていると思う。但し、介護支援専門員が、どこまでその方の人生に踏み込んでいいのか、引き受けてしまっているのかと、とても重たく思ってしまう人もいる。なぜ聞けないのかというところが肝心なところで一つの問題だと思うが、皆さんから提案されているように、エンディングノートの内容について紹介するようなもの、静岡市静岡医師会医療・介護推進センターのニュースレターのようなものが一枚あると私達も持って行きやすいと感じた。

事務局

ニュースレターとは、当市が委託している医療・介護・福祉スーパーバイザー事業の業務の一つで、医師会員や介護事業所等に向けて情報発信しているもの静岡医師会ニュースレター第53号にて、エンディングノートを取り上げている。

坪井委員

訪問看護の利用者は、病気がベースにあり具合があまりよろしくない方なので、エンディングノートについて重く感じたり、最期の段階だと思ってしまうのではないかという懸念もあり、配布しづらいところがある。他の委員の意見のように、チラシのような、軽いイメージで配布ができればよいと感じた。また、できれば元気なときから積み重ねて書いてもらえるのが一番いいと思うので、より多くの市民にエンディングノートが行き渡るといいと思う。

吉永部会長

理想としては、エンディングノートを専門職から勧めるのではなく、患者や利用者などご本人からエンディングノートというような会話のきっかけがあるとベストなので、チラシや周知等が多くあるとよい。

石上委員

本来は元気なうちからエンディングノートに関心を持ってもらえるといいが、元気なときは生活等に必死で難しい。但し、病気になるとエンディングノートや終活に目が行くと思うので、薬局や病院に推奨してもらえれば、もっと皆さんが目を向けるのではないかな。

矢野委員

エンディングノートの趣旨として、全てを埋めるわけでもなくて、使えるところから使ってくださいというところがあると思う。例えば、介護支援専門員であれば、連絡先の記入や連絡簿として使ってください、他の部分はまた参考にしてくださいねと言って配るとか、病院であれば、エンディングノートの8ページの『もしものときの医療の希望』について考えてみてくださいと言って渡す、さらに、市民がその他の部分を見て、葬儀についてやお墓について考えようと思う等、各人において使いやすいところやページがあると思うので、まずはそこを使ってみてくださいと渡すのがよいと思う。そうすると、やはりエンディングノートの現物がたくさん欲しい。また、ダウンロード先はPDFなので、皆さんがパソコンで作りたいと思ったときに、打ち込めるような様式であると便利だと思った。

吉永部会長

PDF 以外に Word の様式があるとよい。

平野委員

矢野委員の意見について、9月、10月の研修に盛り込んでいきたい。また、ダウンロードの様式については、書き込みやすいように、これからブラッシュアップする形でいいと思う。

専門職がエンディングノートを渡すとなると、ハードルが高いことがあるかもしれないが、ページを切り離せて、ダウンロードしていただければページを足せることがコンセプトで、必要な部分だけ配ってもらえれば話のきっかけに使うこともできる。研修の中で具体例や、矢野委員の意見を使わせてもらいながら話をしていきたい。

成島委員

普及啓発について、対象者や誰がどのように伝えていくのか検討した方がいいと思う。

また、資料1の③市民向け公開講座について、9月10日に実施する研修動画の配信ということか。

事務局

9月10日の研修部分のみの録画を、市民向けに公開していく予定である。

成島委員

専門職向けにある程度バックグラウンドがあるところで話す内容と、縁起でもないといったように、受け止めにばらつきがある方々に対する話の切り口や内容は、同じではないと思うがいかがか。

吉永部会長

編集は、することになると思う。

成島委員

資料1の民生委員の役割について、民生委員児童委員協議会として手上げしてくれているのでしょうか。

事務局

市民児協正副会長会等へ説明の上、各民生委員へご紹介を兼ねてエンディングノートを配布している。民生委員からの反応は様々ですが、民生委員を非常に頼りにしている地域の方も多く、地域のことをよくわかっている民生委員に啓発の一翼を担っていただきたいと思っている。

平野委員

成島委員の意見を聞きながら、専門職も1人の人間なので、素朴に自分が使うときはどうするかということを専門職以外の人が使うときはどうするか、いろんなことを考え、多くの課題を突きつけられながら、話をしなくてはならないとよくわかった。

成島委員

全くそうだと思う。一番わかりやすい表現で伝えれば、元々よく知っている方々もそのわかりやすい表現を聞けば、当然、理解できるので、一般の市民の方に合わせた講演内容がベースになれば、元々は専門職だけど不慣れな方々にも必ず伝わるということになるので、そういう方がより包摂的でよいと思う。

事務局

成島委員の意見は、対象者が専門職だとしても市民の方に合わせた話をしてくれればいいのではないかということだったが、令和3年度に実施したACPの市民意識調査を考察してくれた東野教授からは、市民や専門職においても、年齢や知識の層、性別や置かれた立場等において理解や感じ方も違うため、ひとくくりに講演会で行うのはどうかと思われるという提案をいただいている。何を知りたいか、どんな方法でどんなことを伝えて欲しいと思っている集団なのかを情報収取して、その集団に応じた伝え方があるということでは、先

ほど、説明した在宅医療出前講座というやり方で、10人以上の小集団に講師を派遣してその人たちのニーズに応えられる事業を推進していきたいと事務局では考えている。

吉永部会長

小集団向けということでは、清水区医師会で実施している、エスパルス（SPAFS：脳梗塞の原因となる「心房細動」という病気をAIやリモートテクノロジーを活用して早期発見・早期治療し脳梗塞の発症予防につなげる取組）では、生涯学習センターや交流館等20数ヶ所へ手分けして出前講座をしている。申し込みも一番多く、個別の数十人対象の講座は一番届きやすいと感じる。

小作委員

新聞報道後すぐに反応があり、地域包括支援センターへ取りに来る方がたくさんいた。取りに来る方は皆さん元気で、死に向かうということをまだイメージできていないような方も多かったが、これから少しずつ準備していかなくてはいけない等と話していた。しばらくすると取りに来る方は少なくなったものの、地域包括支援センターが対象とする方は比較的元気な方も多いため、訪問などで早めに準備をしましょうということは言いやすいと思う。また、例えば、高齢者虐待で対応した子世代へ、両親亡き後の話になった際に、ツールとしてエンディングノートを出すこともある。エンディングノートを有効に利用しているということと、手に取りやすいような、例えば名刺サイズくらいの小さなものがあってもいいように思う。

また、普及啓発にあたり、前向きにACPに取り組むために、僧侶の話を聞いたり、棺に入る体験をするなど、体験を通じると意外に入っていくやすいのかなと感じた。

訪問看護師は、色々な話をしながらケアをしていくが、介護支援専門員は、死を穏やかなもので終わられるよう支援したいという思いがありながら、何もできないことがある。このため、死を受け入れられないまま亡くなっている方への対応など、専門職向けのACPのすすめ方として考えていく必要があると思う。

吉永部会長

我々の臨床現場でも、死を受け入れられている方は実はほんのごく一部であり、受け入れているとは言っても受け入れてないと思う。それより前のところで、人生について考える機会を家族や大切な方と一緒に持ちましょうということがACPだと思っているので、そういった意味も含めて現場に意識普及させていくことで、何か力になれるだろうと思う。

今日、皆さんからいろいろ意見が出て、ほぼ一致しているのが、このエンディングノートだけではなく、それに対して、リーフレットの的なものを作って普及啓発のことをやって行こうという話が出たので、今後どのようにするか事務局で考えていただきたい。

事務局

今、託されました内容に関しては、持ち帰らせていただき、皆様そして部会長に報告させていただけたらと思っている。

もう一つ、8月に弁護士、司法書士等、医療介護専門職ではない方の集まりで終活支援研究会を開催する。そこでも ACP を含む終活全体をどう普及啓発し介入していくかを考えていく。医療介護に携わっている患者さんでしたら皆様にお力添えをいただいて、普及啓発していくが、どこにもつながっていないなど地域で孤立している方に対して、行政としてどう介入できるかが争点になっていくと思う。終活支援研究会の内容は、皆様に情報共有させていただきたい。

以下を協議し決定した。

ACP（人生会議）の普及啓発について

1 専門職向け研修

（葵区・駿河区の専門職向け）

講師：平野委員

内容：ACP、エンディングノート実践事例の共有

（医療・介護・福祉スーパーバイザー人材配置事業及び在宅医等養成研修事業含む）

時期：令和6年10月26日（土）

場所：グランシップ交流ホール

（清水区の専門職向け研修）

座長：吉永委員

講師：平野委員

内容：エンディングノートの活用や ACP について（在宅医等養成研修事業を含む）

時期：令和6年9月10日（火）

場所：カーニープレイス清水

2 市民向け公開講座

内容：令和6年9月10日に実施する研修動画を編集したものを配信

時期：令和6年10月28日以降

（閉会）

■会議録確認署名

「令和6年度 静岡市在宅医療・介護連携協議会 第1回啓発研修部会・地域支援部会の合同会議会議録」について、内容を確認しました。

静岡市在宅医療・介護連携協議会 啓発研修部会 部会長

氏名（署名）

吉永治彦

■会議録確認署名

「令和6年度 静岡市在宅医療・介護連携協議会 第1回啓発研修部会・地域支援部会の合同会議会議録」について、内容を確認しました。

静岡市在宅医療・介護連携協議会 地域支援部会 部会長

氏名(署名) 小作 穂光
